

駿河台大学・外国語自主学习広場 (SALC) の創設と今後の展望 —他大学での試みと本学の計画—

澤崎 レンネ
竹中 彌生

序論

2009年4月、駿河台大学では新しく外国語教育センターが開設された。センターの開設に先立ち、2007年から新しいカリキュラムの編成とセンター開設のための準備が始められたが、その後2008年には助教採用のための制度及びセンター内に設けられる学生のためのセルフ・アクセス・学習センター (SALC) 設営のための準備も始まり、予算も与えられた。外国語教育センターは本学で提供される外国語全てを統括しているが、SALCの活動も英語に限定されるものではなく、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語を学ぶ学生のためにも便宜を提供している。

本論では、外国語教育センターと同時に発足したSALC (後に本学では「外国語自主学习広場」と銘銘、以後本論では本学のSALCについては「広場」と呼ぶ) 立ち上げのために行った調査、研究及び初年度の活動について報告すると同時に、今後の展望について考察する。

新しい組織や、その組織内の部署を新設するためには、きめ細かな立案、調査、そして運営・管理が要求される。これがどのように行われたかを見直すことは分析そのものの重要性に加え、この組織の運営に携わる人々が引き続き運営の適正さを評価し、更なる必要事項を照査し、改善するために大いに役立つはずである。本論は一つのケース・スタディーであるが、この中では、本学におけるSALC (「外国語自主学习広場」) の計画、調査の段階で得られた情報を整理すると同時に、「広場」の発展の第一段階について要約する。「広場」は未だスタートラインに立ったばかりであるが、大学のカリキュラムで行われる外国語教育の中でも特にこの「広場」で行われるような外国語学習の歴史と発展について、本学の教育および語学教育に携わる人々に広く周知することも本論の目的である。

本論の著者は二人とも長年英語教育に携わってきた専門家であり、広場の準備と開発に関する報告は二人の英語教育での経験と感想が反映されている。したがってできる限り他の語学の教員の活動にかかわる情報も提供するつもりではあるが、報

告は必然的に英語に関するものが主となっている。

沿革

外国語教育センターの発足以前には、授業外での学生の語学学習への支援活動はドイツ語を第二外国語として学ぶ学生および日本語を外国語として学ぶ留学生のために例年行われているスピーチ・コンテスト以外はほとんど何も行われていなかった。しかし、2001年に竹中が週一度、全学の学生を対象に、昼休みに研究室で昼食を取りながら行う英会話グループを発足させ、「ランチタイム・イングリッシュ」と呼び、英会話の他、留学希望学生のための学習支援を行い始めた。その後、数人の英語教員が協力するようになり、やがて国際交流委員会の展示室に移動した。しかし、この空間も手狭となり、それまで非公式な組織として活動していたこの組織に、澤崎が協力して国際交流委員会の支援を頼むこととした。2007年7月、正式に国際交流委員会の支援を得ることとなり、グループの名前も「イングリッシュ・チャットルーム」と変更され、より多くの教員の協力を得て、月・水・金・の各昼休みにゼミ棟の教室を使って開かれるようになった。

その後、英語のチャットルームに参加していた外国人留学生から同じように日本語会話をを行い、友人を作りたいという要望があり、2008年からは「日本語チャットルーム」(後に日本語おしゃべり会と命名)が火・木の昼休みに開かれるようになった。これで、彼らに自然な日本語を話す場を提供するほかに、日本人の学生との交流の機会が少ないという不満にもある程度応えることが出来るようになった。日本語チャットルームには、しばしば英語チャットルームの出席者が訪れ、留学生との交流を図っていた。

参加者は昼食を持って集まり、教員ができる限り参加して、話し合いを円滑に進めたり、ゲームを指導したりした。教員は5、6人がそれぞれ1月に2回程度、順番に受け持つようにし、時には非常勤の教員の協力も得ることができた。そのような時には、学生は本物の英語の会話を耳にすることができ、理解しないながらも、英語を話す人々の中にいる状況を経験することができた。教員の指導はあったものの、学生は、リラックスした雰囲気の中で、自由、活発に話し合い、授業中の教室内とは全く別の時間を過ごすことができた。

英語チャットルームの参加学生の多くは留学を希望し、英語力を高めたいと希望している、あるいは留学から帰国し英語力を保持したいと望んでいる学生であった。他には大学院への進学を希望する学生、選択科目で英語を取っていてさらに英語力

を身に付けたいと考えている学生、そして、社会人入学をした年長の学生も参加していた。様々な種類の学生がいたことは、このグループに大きな活力を与えていた。本学には、いわゆるESSのような英会話グループ活動が存在しないので、学生にとってはこれが唯一の英会話グループであった。

この活動の成功から、新しく語学教育センターを立ち上げる計画への協力を学長から求められた時、この活動にかかわっていた澤崎・竹中はこのような授業外語学学習を可能にする活動が全体の語学教育プログラムの中の重要な要素であるということをも主張し、また、それを可能とする空間の必要性を強く訴えた。

第一段階：語学教育プログラム改正への要望

2007年10月、大学当局は全英語担当教員に対し、本学の英語教育を見直すよう要望した。これに対し外国語教員は迅速かつ詳細に反応した。以下は2009年に語学学習センターが開設されるまでの2年間に行われたことの概要である。

大学からの語学教育改善要請に先立つこと5ヶ月、2007年5月、大学当局は2006年2月28日から3月20日までの間に学生委員会によって行われた138人の卒業生に対するアンケートの結果を発表した。この時の研究の焦点は就職に役立てるために必要な大学教育は何かということであった。

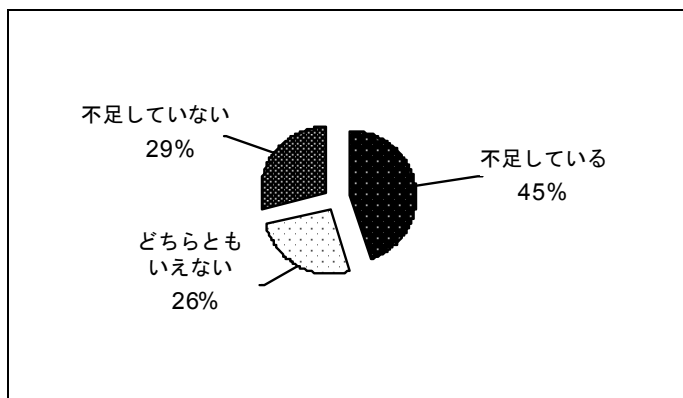


図1 英語や外国語の能力は不足しているか

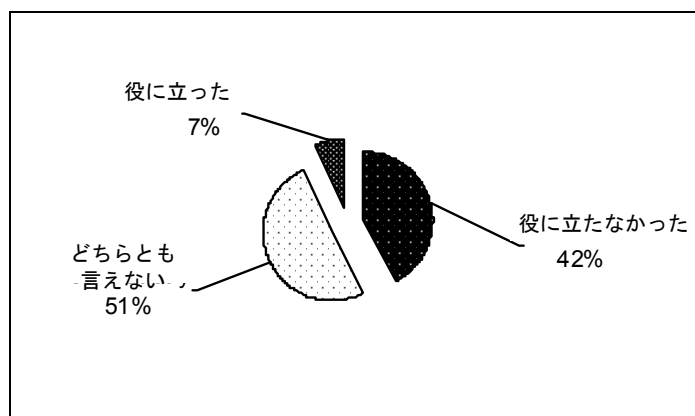


図2 英語・外国語能力が仕事に役に立ったか

上の二つの図は、学生の外国語使用能力及び外国語能力が職場で働くためにどれほど役に立つかということに関する知識と意識の低さを示していると言える。つまりこれらの結果は英語と外国語教育の改善の必要性を示していると言える。文科省は『英語が使える日本人』育成のための行動計画』（2003）の中で、より有効な英語教育の必要性をはっきり表明しているが、この計画は、あらゆるレベルでの日本国民の中学、高校、大学卒業後の英語使用能力を高めることを提言し、さらに大学卒業者については、「職場での英語使用」を可能にすることを提言している。

この文科省の目的にかんがみても、この調査は駿河台大学が英語を積極的に使うことができ、全体として外国語に対して前向きな姿勢を示す学生を育てるための教育と努力を必要としていることを示している。

大学からの要請に応じて、英語教員側は新しい英語カリキュラムの構造と方法概要を説明したレポートを提出した。この新カリキュラムは駿河台大学の一般教育の必要に、よりよく応えるために必修及び選択英語授業の構造と実践を統合することを目的とした計画となっていた。このレポートはこの年の10月に大学側に提出され、これに応えるように、11月、大学側は2009年4月からの外国語教育センターの創設を発表し、教員にセンター設立のための情報の提供を要請した。

この時、様々な形で会議が開かれ、検討が行われ、様々な語学学習の方法が模索、提案されたが、一部の教員は学長との会談で、学生の授業外学習の支援、学生及び教員の会合、教材の収蔵、教員の能力開発などの場となるスペースを用意するように要求した。

このような語学と文化を学ぶための専用の施設を設けるという考えは、これを提

案していた教員にとっても全く新しい考え方であり、駿河台大学の教員の中ではそのような施設についての経験も専門的な知識も、またそのような施設をどのようにして開発したら良いかの方法論も持ち合わせている者は皆無であった。しかし、語学教員として、そのような施設や計画の存在は知っており、そのような施設があれば、大学と学生にとって多大な利益となることは分かっていた。幸い、大学当局は、この提案を前向きに受け止め、後に「広場」となる授業外学習の第一段階をスタートさせるための空間と経済的支援を提供した。この事実は、SALCの設営の歴史を見る限り、日本に於ける他の大学が設営のために大学当局の賛同と支援を得るまでにしばしば何年もかかっていることを考えると、画期的なことであったというべきである。

次に、駿河台大学の「広場」を設営するための準備として行った調査に焦点を当てて述べる。

第二段階：セルフ・アクセス・センターに関する調査

既に述べたように、駿河台大学ではセルフ・アクセス学習センターに関する専門的知識を有する者もまた経験を有する者も皆無であり、澤崎レンネは外国語教育センター設立委員の一人として自主的に、この2点に関する調査を行った。この調査は次の方法で行った。

1. 自律語学学習とセルフ・アクセス学習センターに関する専門書、論文、ウェブサイトの記事を読む。
2. 日本セルフ・アクセス学習学会 (Japan Association of Self-Access Learning) に加盟。SALC設立にかかわった語学教員との話し合いに参加。
3. 関東地域のSALCの見学
4. 日本大学英語教員協会 (JACET) でのSALCに関する研究発表会に参加。

参考文献の検討

自律学習とSALCに関する学術研究を見渡してみると、この領域に関する研究は1960年代の自律学習と生涯学習への興味の流行以来、爆発的に発達し、特に次の3つの分野に集中して議論が行われている。つまり、個人的特長、政治的概念、教育上の実習 (Gardner&Miller, 1999) の3分野である。ジョーン・ルービンは学習者観察に関する研究を始め (Rubin & Thompson, 1994)、良い学習者の条件を調べた。これは1970年代まで語学教育においては良い教育が良い学習に繋がると考えら

れていたのに対して、“学習の成功にとっては学習の自己管理が重要であるという証拠が増えている”(Griffin, 2008, p.11)という考え方の普及に繋がった。

その後、学習者の発達に焦点が置かれ、その結果、良い教育環境の中での自律というものの必要性が明らかにされた。バウド(1988)によれば自律ないし自主性を開発するという事は必ずしも構造化された教授方法を取り払うということの意味せず、むしろ伝統的な授業よりも遥かに高度な構造を必要とするという。(48)セルフ・アクセス語学学習は学習に関する取り組みであり、学習指導への取り組みではない(Garner & Miller)が、その中でも、やはり整理された構造と学習内容、方法の管理運営が必要である。1980年代になるとセルフ・アクセス語学学習における構造とシステム、管理運営の重要性及び教員の教育に関して数多くの論文、著書が発表され、会議、学会が開かれた。1990年代に入るとSALCがイギリスを始め、オーストラリア、香港などで開設され、最近では日本でも開設されている。

ドロンは複雑なe-ラーニングについて、教育者に対する指針として「人々は学習したいと思う時、多くの場合、良く、あるいは少なくとも効率的に学びたいと望むが、できる限り少ない苦勞と勞力でこれをしたいたいと考える」(Dron, 2007, p.2)と述べている。彼は、自ら方向を決める学習は「学習者の自律性、自己管理、自己規制などにかかわっている。この領域は豊かであると同時に、複雑で、その意味するところに関しては様々な見方がある」(p.16)としている。

加えて、以上の自律学習とSALCの分野にかかわる研究からは、一つの組織の中で効果的な支援活動を創設するのは非常に複雑な過程があり、そのようなプロジェクトに対する理解と支援を得ることは大変難しいということが分かった。外国語教育においては、カリキュラム開発や教室内での実践については多くの研究が行われ、関心が示されてきた。しかし、これらの研究によれば、外国語が上達する学生は、優れた語学教材に触れる機会が多く、また授業外で多くの学習者と実践学習ができた学生であることが分かる。SALCの目的はそのような機会を多く与えるための構造と支援を与えることであるが、このことを理解してもらうことは、伝統的な語学教育を行なってきた教員の間ではきわめて難しいこともまた事実である。

SALCの構造

セルフ・アクセス学習センターは、ある組織の中で、語学及び文化を学ぶための教材、学習者の訓練、他の学習者、教員、来訪者との交流の支援などを提供するための施設である。構造、計画及び運営・管理の方法は学生の必要と組織の財力により組織ごとに異なっているが、SALCについての調査から出てきた共通点は、成功した例では、常に学生との連絡がよく、構造に柔軟性があり、共同体としての意識と優れた協力関係と協調性があるということである。

基本的に、SALCの構造は柔軟である。その組織と、学生に特有な必要性に応えることができているならば、規模は大きくても小さくても構わない。活動や学習者訓練を中心にしているものもあれば、オンラインあるいはコンピューターによる学習を中心にしているもの、また語学学習教材と支援が中心で、どちらかといえば図書館のようなものもある。SALCはそれぞれの組織に特有の必要、予算、教員と職員の制約などに応じて、その組織に適したものを作れば良いのである。加えて、SALCの創設は常に変化し流動的な進化をするものであるということが言える。しばしば、SALCの活動は教員や職員ではなく、学生たち自身の主導及びリーダーシップに基づくことが多い。

本論はSALCの複雑な詳細に渡って報告するのが目的ではない。むしろ、SALC創設に当たり必要な基本的な要素及び考慮すべき全般的な事柄を列挙する。

- ・ 中身：教材、一次資料、活動、技術、他の学習者
- ・ 人員：教員、カンセラー、マネージャー、教材製作者、評価者
- ・ 学習者：計画立案者、まとめ役、相談役、動機付ける人、評価者
- ・ 他の学習者：パートナー、同年代の評価者
- ・ 組織：学習者の必要に応じた最良の支援が可能な設備及び仕掛けを用意。提供する。

次の図は、セルフ・アクセス語学学習に於ける、学習者の中心性と他の人々と学習環境との相互作用の複雑さを示している。



Figure 1.2. Interaction between the learner and the self-access environment

図3 学習者とセルフ・アクセス環境の相互作用

ベンソン (2002) は香港大学のSALCでの最初の10年間について考察しながら、セルフ・アクセス学習センターを使うことと自主的に学ぶことの違いを定義している。彼によれば、前者が “simply describ[ing] something that students *did*, either of their own free will or because their teachers told them to do it” であるのに対して、後者は “described a particular *way of doing it*, which involved both the development of certain skills and attitudes and a willingness to develop them” (p.4)である。彼にとっての課題は、全てのSALCの管理・運営者の課題でもあるのだが、それは、センターを使おうという動機を持っている者の必要を満たすだけでなく、伝統的な授業での学習を好む学生、あるいは学習に全く興味を持たない学生をも対象とすることである。したがって、重要な目的はSALCの活動の目的を理解し定義し、分かりやすく魅力的な方法で学生に伝えることである。これにはSALC及び学習者についての継続的な検証および評価が問題となってくる。

検証及び評価

SALCについての評価と検証は世界中のSALCの基本的な課題であると同時に、しばしばないがしろにされてきた問題である。ReinderstとLazaro による5カ国における46のSALCに関するの研究 (227) によれば、24の施設で、いかなる検証も行われていなかった。その原因は、時間及び要員の制約、相談対応の行われていなかった施設での学生との接触の欠如及び機関側が特に要求しなかったことなどである。

2009年11月、David Gardnerと Marina Chavezにより、SALCについて話し合い、検証方法と、基準を設けるためのフォーラム (<http://cad.cele.unam.mx/sac/>) が創設された。SALCを創設し維持するためにはしばしば、莫大な投資がなされているが、これには説明が必要である。(Morrison 2006) Gardner (1999) はSALCを検証する際の問題点を5つ挙げている。

1. セルフ・アクセス・システムの多様性（個人向けに個別化されている）
2. セルフ・アクセス・システムの独自性
3. 情報の蒐集（学習者の行為について授業内に比べて管理することが難しい）
4. 情報の分析（学習者についての情報が少ない）
5. 評価の目的（しばしば、学習についてよりも、教育と資料管理について、より多く行われている）

SALC自体の評価が何であれ、語学学習目標を立て、学習者の進歩を評価するためには学習者を教育し、支援することに注意が向けられなければならない。

SALC見学、発表への参加及び文通

先ず、JASAL(Japan Association of Self-Access Learning)、神田外語大学、神田外語学院、創価大学、津田塾大学の教職員の方々に駿河台大学の教職員をそれぞれの大学および学院のSALCに迎え入れてくださり、また文教大学はJACET(Japan Association of College English Teaching)に於いての発表により、それぞれの大学が経験から得た様々な有益なアドヴァイスを下さったことに対して心からお礼を申し上げたい。駿河台大学は、本学のSALCの準備のために各大学および学院の教職員と学生の皆様から、多くの指針を戴くことができた。

それぞれの大学及び学院は、SALCの開発と管理運営について独自の観点と見識を提供されたが、駿河台大学のSALC設営のために特に重要だと考えられたのは次の項目である。

1. **レイアウトとデザイン**：SALC はある意味でスーパー・マーケットのように考えられるべきで、「買い物客」が来るたびに、彼らが必要とするものを容易に見つけることができるように、分かりやすくラベルがついているということである。家具はSALCが発展するのに合わせて自由に並べ替えができるように、可動式で融通の利くものであるのが良い。雰囲気はくつろいだもので、学生が学習し、互いに交流する時に自由に飲食できる、にぎやかな空間が設けられてい

るべきである。同時に、個人あるいは、小さなグループが録音したり、静かに学習したりできる静かで、防音された空間も必要である。

2. **教材**：各種の書籍、書類、そして電子・電気教材が提供される必要がある。予算が少ないSALCは高価な教材、例えばコンピューターのようなものは見合わせ、安価ではあっても利用度は高いCD付のGraded Readers（等級別学習用教本）を置いた。
3. **活動**：繰り返し発せられた警告は、SALCの成功の鍵は、SALCが提供する人的サービスの量と質であって、施設や道具の美しさではないということである。一つの哲学は、「活動は重く、教材は軽く」である。これは、言うは易しいが行うのは難しい。あるSALCの失敗の例は、教授陣の善意と希望が学生の必要と希望に適合していなかったために参加者が少なかったことが原因だった。学生と話し合いを行い、学習計画を修正しなおす結果となった。さらに適切な忠告は、SALCの運営に携わる人々の継続的な訓練である。このことは、特に期限に制限のある教職員について言える。
4. **管理運営**：多くの場合SALCは一人か二人の教員による草の根的努力によって開拓され、その教員の研究室などで細々と始められているが、この活動が、大学全体の活動として行われるようになる時、その成功の鍵は協調ということであり、これはSALCの最も基本的で重要な要素である。事務的支援、教員の関与、学生のリーダーシップ、学習者訓練の支援、活動やワークショップなどの全ての面での協調が必要である。

第三段階：駿河台大学・「外国語自主学习広場」開設のための準備

本学の語学学習広場の開設に当たっては、先ず外国語学習センター（LEC）の創設が優先され、「外国語自主学习広場」以外の様々な要素が検討されなければならなかった。2008年度の春学期中のLEC準備委員会の仕事は、まずLEC規約を作ることと、英語に関しては必修授業の習熟度別クラス分けと全学共通のシラバスの作成を含む新しいカリキュラム編成のための教務の詳細を決定することであった。

LEC創設のための様々な業務の緊急性のために、「広場」の設営に、多くの時間を当てることができず、そのレイアウトと設備、備品についてはすでに開設されている他大学のSALCから得た情報を指針とするほかなかった。様々なSALCを調査した結果、新しいSALC開設に当たっては学習者に焦点を当てて考えることが重要であること、そして学習者に相談することも必要であるということがわかったが、そのた

めの時間はなかった。当面は「広場」の活動の中身については実際に「広場」を使う過程において、学生と教員との交流を通じて暫時発展させ、必要に応じて、備品、教材なども拡張してゆくという方法を取らざるを得なかった。

他大学、施設におけるSALCからの情報を得るための見学は5月の間の2週間を使って、教員6人と国際交流課の職員3人で行われた。最後の見学の後、学長により外国語教員の会合が招集された。この機会に澤崎は見学から得た結果を元に「外国語センターの教職員について」という提言を行った。見学をした施設の全てが、語学教育の分野での経験が豊富で献身的な教職員の必要性を強調したということから、この提言では、このような教職員の必要性、その仕事の内容、地位、そして全大学にとっての利益についての概要を述べた。全ての施設が、適切な要員をそろえることの重要性をSALC以外の人々に理解してもらうことと人材のための予算を得るための苦労と困難を経験していた。この知識を元に、この提言は、この重要な事実を大学当局に理解してもらうことと本学のSALC設立のための最も重要な課題とすることを目的として行なわれたのである。

新学年が近づくに連れ、「広場」の開設のための準備が始まった。第二講義棟5階の就職センター跡のスペースがリフォームされ、助教の控え室と国際交流課のスペースが確保され、中央の広い空間は、学生の談話室として準備され、現代的な形をしたテーブルと明るい色の椅子が置かれた。壁には床から天井まで届く本棚が設置された。テレビ視聴エリアにはサテライト・テレビが視聴できる大型スクリーンのテレビが一台置かれ、ブルーレイDVDプレーヤーの入ったしゃれたキャビネットも用意された。他に3人がけの横長椅子が4脚置かれた。

学生相談窓口として助教控え室と直結したカウンターが設けられ、間に仕切りのある席が3席用意された。これら全ての一番奥に静かな部屋の入り口がある。これが自習室で、自習のためのブースが30、コンピューター4台、少人数学習のためのテーブル2個と椅子4脚、CDプレーヤー、本棚が設けられている。（この少人数学習のためのテーブルは、今はただテーブルがあるだけであるが、本当は、学生が2-4人ぐらいで、しかし、他の人には迷惑をかけずに、また邪魔もされずに学習することができるようにするのが目的で、防音装置付のブースが必要であるが、これについては莫大な予算が必要であり、設置されることが将来的には理想である。）

外国語を専門とする学部も学科もない本大学において、外国語学習のためにこのような優れた施設と資産が設営されたことは画期的なことであると言うべきである。加えて、この施設を国際交流課と統合したことは海外に留学する前後の学生に対し

支援を行うために教員と職員が協調できる理想的な空間を作り上げている。また外国からの留学生も訪れる空間であるために、日本人学生と外国人学生の接点ともなることができる。大学当局がこのような学生の外国語と海外文化の学習支援のための設備を整えたことはまさに賞賛に値すると言ふべきであろう。

第4段階：SALCのオープニング，2009年春

場所は確保され物理的な準備もされたが、4月の開設時には、「広場」の活動と運営については不明確であった。誰が責任を持って「広場」の活動を統合し、調整し、どのようにして学生が新しい施設のことを知り、教材を使用し、学習グループや活動を行なうことができるようにすればよいのかも全く不明であった。2009年の春学期には、新しく外国語センターで採用された二人の助教と国際交流課の職員以外にはこの空間を使用する者はほとんど皆無であった。

「広場」は空間としては素晴らしいスタートを切ったが、SALCが成功裏に機能するために必要な基本的な要素が欠けていた。用意されなければならないものは以下のものである。受付、入り口に掲示板、相談時間を書き込む予定表、相談員、ホワイト・ボード、CDプレーヤー、地域汎用DVDプレーヤー、本その他の教材、そして何よりも学生による参加と活動である。広場は現代的で清潔に見えたが、中身と学生による活動がかけていた。この空間に入ると空の本棚が目飛び込んできた。何よりも、新設されたばかりでPR不足であったために、ほとんどの教員も学生もこの広場の存在すら知らなかった。さらに、「広場」が他にはあまり人が通らない階に設置されているために、何か厳粛な雰囲気さえ漂わせていた。

LECでは2009年度から二人の助教が採用されていた。外国語センターの活動を手伝うことは彼らの仕事の一部で、その中に広場の活動も含まれるはずであった。しかし、彼らは10コマという専任としての授業数の他に取得教材のデータ管理、書籍のラベル貼り、CDやDVDの整理、授業用書類のコピーと教員への配布、eラーニング教材のインストールなどで、広場の活動の計画や学生の相談などに割り当てる時間は足りなかった。現時点では、時の経過と共に外国語センターと広場がしっかりと確立され、助教の仕事量が軽減され、広場の活動のために割り当てることのできる時間が少しでも増えることを望むばかりである。

一つの救いはこの場所に設置されている国際交流課に用事のある教員や学生がこの場を訪れ、何かが始まっていると気付き始めたことである。そして上記の二人の助教も授業時間外には同じ空間に居て、少しではあっても、広場の教材の管理や学

生の相談に当たることができたことである。こうして、少しずつ広場の活動は始動し始めた。

素晴らしい空間は準備されたが、実際の広場の使用を活性化させるためには未だ大変な仕事があるということは明らかであった。そして、この広場を運営するための組織が何としても必要であることも明らかであった。広場の教材と活動を責任をもって担当し、組織・運営するグループも人もなかった。そのような職責と、場合によっては、委員会の設置は将来の可能性として話し合われてはいるが、現時点では未だ解決されていない。

第5段階：SALCの活性化2009年、秋

春学期の終わる頃、数人のチャットルームやしゅべり会を手伝っていた教員が「広場」の管理運営を手伝うことに賛同した。この教員たちは、基本的な学生中心の活動を組織することを目的としたある種のアドホック・ワーキング・グループを作って、創設予算の残りが最優先の教材の購入に当てられるように監督し、教材を整理し、活動の記録をとり、大学当局に対して運営のための協力と「広場」のための資金提供を続けるようアピールし続けることを決めた。

春学期の終わりには外国語センターの運営委員会は「広場」のワーキング・グループを正式に認定し、グループは夏季休暇中に3回集まり、購入された教材の整理、広場使用方法のポスター、BCCで流される学内広告、教員に宛てた広場開設を知らせる手紙などの作成に当たった。駿河台大学のSALCを「外国語自主学习広場」(英語ではLanguage Learning Zone)と名付けることに決定したのもこの時である。

先ず、外国語センター開設以前から活動していたが2009年春以来停止することを余儀なくされていた英語チャットルームと日本語しゃべり会を再開した。それに加えて、もう一つ英語のグループFun in Englishがスタートし、音楽、ビデオ、ストーリー・テリング、手芸、祝日イベントなどを行ない始めた。さらに、韓国語の教員は韓国語サークルを広場で行ない始めた。これらのグループが形成され、教員や学生が広場について話題に乗せ始めるとフランス語やドイツ語を話したい学生の会話室も自然発生的にスタートした。

2009年度の活動

4月～ 教材, チャットルームやFun in Englishで使うためのSharing用の教材, ファイル等の準備, 管理——本の購入, ラベル付け, 配架, CDのチェックアウト

4月～ 助教による学習相談: 予習・復習・宿題への対応, 疑問への解答

5月～ 創価大学その他の語学センターの見学

8月中 毎週金曜日, 数名の教員と助教が「広場」に集まり, 教材の整理, ファイル(教材のほか「広場」利用学生の記録用ノートやファイルを含む)やバインダー作りのほか, 広場を使う学生のためのルール作り, ポスター作りなどをした。ルールは英語と日本語で作り, ポスターは日本語のものを作った。

10月～ 毎週水曜日, 日本語おしゃべり会と韓国語おしゃべり会, 木曜日にFun in English, 金曜日に英語チャットルームを開いた。

12月～ 自然発生的にドイツ語とフランス語の会話を希望する学生が集まり始め, 毎週金曜日にドイツ語・フランス語チャットルームを始める。大学院生も参加。

その他, ハロウィーン・パーティーやクリスマス・パーティーを通じて, 語学, 文化を体験するほか, 普段「広場」とはあまり関係のない学生や地域の人々も引き込むことができた。

2009年度の活動は以上であるが, その間少数ではあるが学生が自習室利用やテレビ視聴に訪れている。「広場」の開設の周知が未だ不十分であったと考えられ, 未だ利用状況はあまり良いとは言えないが, 少しずつ増加している。

この間, 学生の談話室エリアにあるキャビネットの中身が整え始められ, キャビネット上部には文具その他学生が自由に使える物が収められた。この中には, 教材を整理, 管理し, また学生の活動への参加を記録するために, 二種類のバインダーが用意されている。一種類目は, それぞれのスタディーグループのデーターと教材を整理している。このバインダーには, 各スタディーグループの学生たちが自由に使用して, 彼らの語学のスキルを向上させるための教材が収められているが, さらに各教員には必要, 有用と考えられるものを加えるよう呼びかけている。二種類目は各語学別に用意されたバインダーである。さらに, 便箋や封筒, 紙など, 学生が様々な学習の場面やイベントの時に使える紙・インク・マーカー等の文具, 活動を記録するための写真紙なども購入され, このキャビネットに収められている。

広場での活動の様子は外国語センターのメンバーである語学教員の中でも知らない者が多かった。9月に澤崎はセンター運営委員会で, 他大学のSALC見学で得ら

れた情報を報告し、1月には、澤崎と竹中が英語教員の連絡会で広場の一年間の活動報告をビデオを見せながら行い、広場を案内した。教員たちは広場の設備とその可能性について絶賛し、新年度には学生たちに広場を使用するよう勧めることを約束した。この見学がきっかけとなって、外国語教育センター会議では「広場」をどのようにして学生たちに紹介するかを話し合った。その結果、各学部で、一年生に対して、年度の初めに広場見学を行なうこと、現代文化学部ではオリエンテーションキャンプに行く途中のバスの中でビデオを見せることなどを決めた。2月には、外国語センター運営会議で、他の語学の教員にもこのビデオを見せると同時に、竹中が、広場の一年間の活動と今後の展望についての報告を行い、今後の協力を要請した。

この研究の著者二人は、広場に対する文科省からの支援の申請を行なうよう現代文化学部に提案した。この申請が受理されなくても、この申請を行なうことによって同僚たちに、セルフ・アクセス学習というものについて「広場」の活動の発展と拡大が大学と学生のためになるということの理解に繋がることを期待している。

中・長期的展望

「木を見て森を見ない」という格言がある。セルフ・アクセス学習センターの開設のための細々とした事柄の中で二つの基本的な目標を忘れてはいけない。第一に、授業を補完し、支援し、留学生の支援を行なうための環境と設備を作ることと、第二に、ストレスの少ない、楽しい学習環境の中で質の高い教材を使って語学と文化の学習を可能にすることである。

セルフ・アクセス学習の専門家で、有名な神田外語大の優れたSALCの創設の先頭に立った教員ルーシー・クッカーは学生が活動と教材の管理運営の中心的役割を果たすようにならないと忠告している。どのように学生を直接的にかかわらせるかということに関する澤崎の質問に対しては次のように答えている。もちろん次の課題は、SALC全体が詳細に注意深く準備計画することが前提となっている。

1. 運営の基本的要素に学生を関与させる：センターの管理・運営方法、設計、提供されるべき教材などを選ぶ。これは、ボランティアでも、報酬を支払うアルバイト学生でも良い。
2. 学生だけの、あるいは教員も参加する委員会に学生を参加させ、継続的にセンターの教材や備品の選択を行なわせる。

3. 教材についての感想を書かせ、それを掲示し、その価値について他の学生に情報を与える。
4. センターを飾るための絵や作品を学生に作ってもらう。
5. 教材を整理し、貸し出すカウンター内の仕事を学生にさせる。
6. クラブを作る：映画、本、音楽などについて、学習者のために学習者によって行なわせる。教員が支援しても良い。
7. センター内で使うための教材を学生に作製させる。

次に学生中心の目標のほかに、駿河台大学でのSALC整備に必要な目標を挙げる。

1. 外国からの留学生を支援し、駿河台大学の学生が外国人学生から学ぶための支援をする。

文科省が作成した日本に於ける高等教育についての報告によれば、2008年7月、文科省は他の関連省庁と共に2020年までに日本の高等教育機関に於いて海外から30万人の留学生の受け入れを目指す「留学生30万人計画」という計画を発表した。この報告によれば、2008年5月の時点で、日本に於ける留学生の数は123,829人であった。したがって、この計画では、10年後にはざっと三倍の留学生の受け入れ増加が見込まれる。この増加により留学生に対する十分な受け入れ態勢の準備と同時に、これらの留学生と日本人学生との間の有意義な交流を可能とする方策を講じることが必要となってくる。文科省はこの計画の目的の一つを「日本を世界により開かれた国とする（文科省『留学生30万人計画骨子』2009, p15）」としているが、本学外国語学習広場が提供する場と内容は日本人だけではなく外国からの留学生にとっても有用なものとなり、日本人と留学生の交流の機会をただ単に作るだけでなく共に学ぶ中で、質の高い交流を可能とするはずである。

2. 学生の実践力開発の支援：大学で得た学習能力と技術は就業力にもなる。

広場で得られる語学の知識とスキルのほかに、語学と文化を学ぶ過程において得た様々なスキル、例えば時間の管理、目標設定、計画立案、教材の選定、方法論と戦略、自己評価と考察、発表能力、統合能力などは全て、仕事を遂行しキャリアを前進させる上で必要なスキルに繋がる。さらに広場で身に付けた自主的に学ぶ姿勢と積極性は人生の様々な場面で役に立つはずであり、広場での活動に参加し、これらのスキルを身に付けた学生たちは卒業後の人生において有利な立場

に立てることとなる。

さらに駿河台大学の教育とキャリア・デヴェロップメント計画に合わせたSALCの整備は、メディア、コンピューター関連、スポーツ、図書館学、法律、経営、文学、学芸員、観光・ホスピタリティーなどの分野における職業につく学生のために有益となるような語学、知識などに合わせて教職員が教材と学習計画を作ることを可能にする。広場の活動を学生の必要に直接合わせて計画することは、学生が広場の提供する可能性と学習の機会を利用しようという動機付けになるはずである。

3. 学生の体験の質を高める

自主学习広場は、様々な学生の必要を満たすことができる。外国への留学を目指す者、海外留学から帰国した者、観光のように語学が重要な分野に就職しようと希望する者、読書が好きな学生や図書館員になることを希望する者などである。多くの学生は語学学習に興味を持っているが、学内でその興味を満たす方法を知らないでいる。「広場」はそのような隙間を満たし、能力が開発されないままで終わるかもしれない学生を育てることができる。一例を挙げれば、2年生の英語の発展クラスの学生Aは、内向的な性格で友人がいないと言い、一人で旅行し、読書をするのが好きであると言っていたが、秋学期から始まった広場の行事に定期的に参加するようになった。彼女はe-ラーニングのシステムと実力別の読本を知ったときに目を輝かせた。興味深いことに、彼女の興味範囲と性格から、彼女は「孤独な人間」と看做されるかもしれないが、彼女は他の学生と積極的に交流し、活動の際に英語で反応する数少ない学生のひとりとなった。彼女はこのような自分自身を表現するための機会がなければ、彼女の社会的なライフ・スタイルに適したクラブもサークルもない中で、大学の中で埋もれたまま、輝くこと無しに卒業していったかもしれない。

もう一人、一年生の英語の習熟度別クラスの一番下のクラスの学生で、授業中よく発言はするが、友人が居ない学生Bは、昼食を一人で取るために、「広場」を利用して、そのような時に、英語のチャットルームが始まり、その輪の中へ誘うと、最初はおずおずと参加したが、やがてレギュラーメンバーの一人となり、活発に活動に参加するようになった。今では3年生の時に英語圏に留学したいと目を輝かせて希望を述べるようになった。

このように、広場の活動は、ここでの活動がなければ大勢の学生の中にただ埋

もれてしまい、自分を見つけられずに居たかもしれない学生が花開く場所ともなるのである。

4. 大学の魅力として受験生をひきつける

高校生の多くは何か独特のもの、自発的に自己を表現し、開発する機会を求めている。彼らはまた、行事に協力し、計画し、リーダーシップをとりたいとも考えている。学生の一人は著者の英語のクラスが「大学らしい授業だ」と言った。その意味を尋ねると、高等学校では、教師が情報を与え、学生はそれをただ記憶するだけであった。けれど、著者のクラスでは、学生たちは協力し、様々な考え方を探求し、自らの考えを他の人々が理解するように表現することが求められた。週に一度のクラスでは、このような活動を行ない、目的を達成するためには限界がある。しかし「広場」の活動はこのような学生の欲求を満たすのには理想的である。教室内の静かで動きのない環境では語学と文化を学ぶために必要な豊かな環境を作り出すのが難しいのに対し、「広場」の活動的な雰囲気と環境は自己探求と発見、そしてグループ協力作業の連結を可能にし、大学の中ではなかなか見つけることのできない大変魅力的な場面となる。

結論

本研究は、外国語教育の分野におけるセルフ・アクセス学習センターの設立に当たったの困難と駿河台大学の特定の状況における複雑さを示している。教師を中心とした教室内の学習という伝統から離れ、未だあまりはっきりとしない領域である協力と共同体を基本とする学習環境に入るためには周りの理解を得、計画を立て、運営、評価、反省を行なう上で、弛まない努力が必要となる。このケース・スタディーは、駿河台大学内の人々の努力の統合、外国語教育コミュニティーの協力的な同僚たち、そしてこの分野における学外の研究者や実践者の支援が駿河台大学におけるSALCの設立に繋がった過程の記録である。出発点に立つ我々は、幼児期を脱して、グローバルな社会における強力で慈愛深いリーダーになると期待できる将来の社会人を育てるための教育計画を作るための勢いを得たいと願っている。

付表A

SALCに関連する組織とウェブサイト

- ・ Hong Kong Association for Self-Access Learning and Development (HASALD)

<http://lc.ust.hk/HASALD>

- The Independent Learning Association (ILA):
<http://www.independentlearning.org>
- Innovation in Teaching: <http://innovationinteaching.org/>
- International Association of Teaching English as a Foreign Language (IATEFL)
Learner Autonomy Special Interest Group (LA SIG):
<http://learnerautonomy.org/sac.html>
- Japan Association of Self-Access Learning (JASAL):
<http://jasalorg.wordpress.com/>
- Japan Association of Language Teaching (JALT) Learner Development Special
Interest Group (LD SIG): <http://ld-sig.org/>
- The Validation of Self-Access Centres Project: <http://cad.cele.unam.mx/sac/>
- AILA Research Network on Learner Autonomy:
<http://renautonomy.wordpress.com/>

日本に於ける大学のSALC (代表的なSALCのリスト)

- 秋田国際大学 (Center for Independent Language Learning (CILL) and
Language Development Center (LDC)):
<http://www.aiu.ac.jp/CMS/index.php?id=156>
- 神田外国語大学 (千葉) (English Language Institute (ELI) and Self-Access
Learning Centre (SALC)): <http://www.kuis.ac.jp/e/resources/salc.html>
<http://theSAC.wordpress.com/>
- 南山大学 (名古屋) (World Plaza)
- 新潟県立大学 <http://www.unii.ac.jp/index.html>
- 椛山女学園大学 (名古屋) : <http://www.sugiyama-u.ac.jp/>
- 創価大学 (八王子) (World Language Center): <http://www.soka.ac.jp/WLC/index.html>
- 広島文教女子大学
- 崇城大学 (熊本)

付表B

Questions asked JASAL list members prior to SALC visits

1. What kind of layout is conducive to high usage?

- a. Group space vs. individual and pair/small group booths
- b. Student, staff and language teacher usage spaces
2. What kind of materials is desirable?
 - a. Balance of electronic- and paper-based
 - b. Student and teacher resources
 - c. Specific 'must' items
3. What kind of support to offer students, staff and faculty members?
4. What are important questions to ask / things to look for when visiting a SAC?

Questions asked during SALC visits and interviews

1. What kind of layout is conducive to high usage?
 - a. Group space (for students and teachers)
 - b. Individual space (for listening / recording)
 - c. Pair booths (for conversation / recording)
 - d. Staff space (desks/office)
 - e. Language teacher space (desks/office)
2. What kind of materials is desirable?
 - a. Balance of high tech and paper-based
 - b. High-tech: Listening booths; Recording booths; Conversation booths; Computers; DVD stations; Satellite TV stations
 - c. Student resources: Periodicals; Graded readers / CDs / CDRoms; Skills based texts/worksheets; Testing practice materials; Computer Assisted Language Learning (CALL); Satellite TV; DVDs/videos
 - d. Teacher resources: Textbooks; Language teaching resources
 - e. Other 'must' items?
3. What kind of programs / support / training to offer students, staff and faculty?
 - a. Students: Links to foreign language classes; Independent study; Foreign exchange students
 - b. Staff: Office staff; Part time student assistants; Director; Organizing committee

- c. Faculty: Full-time tenured; Full-time contract; Part-time
4. Questions to ask / things to look for.
 - a. Check out system vs. center use only
 - b. How to monitor use (show student ID?)
 - c. How to evaluate use (Record numbers of users?)
 - d. How to encourage teachers to incorporate center use in their classroom instruction.
 - e. How to encourage students to use the center.
 - f. How to encourage students to take leadership roles in center activities.
 - g. Troubleshooting at the planning stage: Budgeting; Layout; Organizing; Materials; Other
 - h. Troubleshooting at the maintenance stage: Recurrent costs; Damaged, lost materials; Equipment upkeep/replacement; Other

参考文献

- Benson, P. (2002). Rethinking the Relationship of Self-access and Autonomy. *Self-Access Language Learning*. Newsletter of HASALD (Hong Kong Association for Self-Access Learning and Development). 5, pp 3-10.
- Boud, D. Toward Student Responsibility for Learning. In D. Boud (Ed.), *Autonomy in Learning*. London: Kogan Page.
- Breen, M.C. & Candlin, C.R. (2003). The Essentials of a Communicative Curriculum in David R. Hall & A. Hewings (eds.). *Innovation in English Language Teaching: A Reader*. New York: Routledge.
- Cooker, L. (2010). Correspondence, JASAL Discussion Community. Retrieved February 19, 2010, from <http://jasaldiscuss.blogspot.com/2010/01/adventures-in-self-access.html>.
- Dron, J. (2007). *Control and Constraint in E-learning: Choosing when to Choose*. Hershey, PA: Idea Group Publishing.
- Garner, D. & L. Miller (1999). *Establishing Self-Access: From Theory to Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Griffin, C. (2008). *Lessons from Good Language Learners*. Cambridge University Press.

- Jennings, S. (2007). Maebashi Kyoai Gakuin College: Discussing the Future of the English Course Curriculum. *Koki Taken Maebashi Kokusai Daigaku Honshu*. No. 7. pp. 171-187.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2003). Regarding the Establishment of an Action Plan to Cultivate “Japanese with English Abilities”. Retrieved February 11, 2010, from <http://www.mext.go.jp/english/topics/03072801.htm>.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2009). Pamphlet “Higher Education in Japan”. Retrieved February 11, 2010, from http://www.mext.go.jp/english/koutou/detail/__icsFiles/afieldfile/2009/12/03/1287370_1_1.pdf.
- Morrison, B (2006). Mapping a Self-access Language Learning Center. In: Lamb, T. & Reinders. (eds.), *Supporting Independent Learning: Issues and Interventions*. Frankfurt: Peter Lang.
- Reinders, H. and L. Noemi (2007). Current Approaches to Assessment in Self-access Language Learning. *TESL-EJ* 11,3.
- Rubin, J. and I. Thompon (1994). *How to be a More Successful Language Learner*. Boston, MA: Heinle & Thompson Heinle Publishers.